



台湾 自然体の親日

台北支局長 杉山 祐之

人が日韓のアイドルを比較し、韓国に軍配を上げると、少し胸がざわついた。

台北の繁華街にある韓国ブランドのブティックで、女性店員が笑顔で話した。

自分の心にある「台湾人は親日」という固定観念が刺激されたのだろう。

「台湾女性の多くは、韓流アイドルが着ている服にあこがれます。日本のアイドルの衣装は、なんだかアニメみたいで……」

一般的な傾向として、台湾人が日本人に親しみを持っているのは間違いない。食堂でもタクシーでも日本人には優しい。テレビCMには日本語があふれる。

台湾では、韓流スター離婚のニュースが一般紙の一面トップになる。その人気は分かっていたが、台湾

ただ、当然ながら、一人ひとりの対日観は違つ。世代ごとの特徴もある。

第2次世界大戦で日本が敗れる1945年8月まで、日本統治下の台湾で日本人として育つた世代の多くは、日本をよく知られているように、完璧な日本語を話し、日本の文化や精神を大事にしている。彼らは既に社会の一線を退いた。

戦後、中国大陸で共産党との内戦に敗れた国民党が台湾に逃れ、独裁体制を敷いた。人々は、有無を言わさず「中国人」にされた。当時を知る日本の知識人は

「あの頃の台湾は中国以上に反日的だった」と言う。40歳以下の人々は、基本的に、民主化後の台湾しか知らない。その多くは、自

一期、歴史を共有した最も身近な先進国だ。自由や民主主義の価値観のほか、かわいい文化、漫画・アニメも共有できる。「日本人」

「敵」でも「味方」でもない。彼らにとって、日本は、

今の若者が学ぶ歴史教科書には、1937年の南京事件で日本軍が「30万人以上を殺した」との記述もある。本が好き」と言う。

「中国人」といった自己認識を強制されることなく、自由な台湾人として、「日本が好き」と言う。

「台湾人が日本に魅力を感じるための努力を続けなければ、その「親日」はいずれ冷めていくだろう。台湾人の対日観は、日本の姿を映し出す鏡でもある。

を研究する黄智慧氏は、こうした意識を土台にした日台関係の現状を「自然体の隣人関係」と呼び、その上で、「自然体の関係は、お互いに努力しないと維持できない。無条件の親日などありえない」と語った。

歴史に根ざす中韓の「反日」に疲れる日本人の一人として、台湾は一種の救いだと思ふ。だが、日本側が、変化する台湾を理解しつつ、台湾人が日本に魅力を感じるための努力を続けなければ、その「親日」はいずれ冷めていくだろう。台湾人の対日観は、日本の姿を映し出す鏡でもある。

公的な研究機関・中央研究院で、台湾人の対日意識